

難ルートを辿って双耳峰の策ヶ岳 2629m

(報告) 赤澤東洋

- 期 日：2017年8月27日(月)～28日(火)
- メンバー：赤澤、ツーさん

冬期、中央高速道の笹子トンネルを抜け甲府盆地に出ると目の前に真っ白に雪を頂く白根三山を盟主とする南アルプスの大パノラマが広がり思わずハンドル握る手が疎かになってしまったという経験をお持ちの方はいるのではないかと思います。そんな時、私は北岳や赤石を横目にして真っ先に捜すのが策ヶ岳だ。高さでは赤石や聖には敵わずひっそりと佇む双耳峰はそれなりに目立つ存在で、山登りを始めて以来ずっと気になっていた山だった。

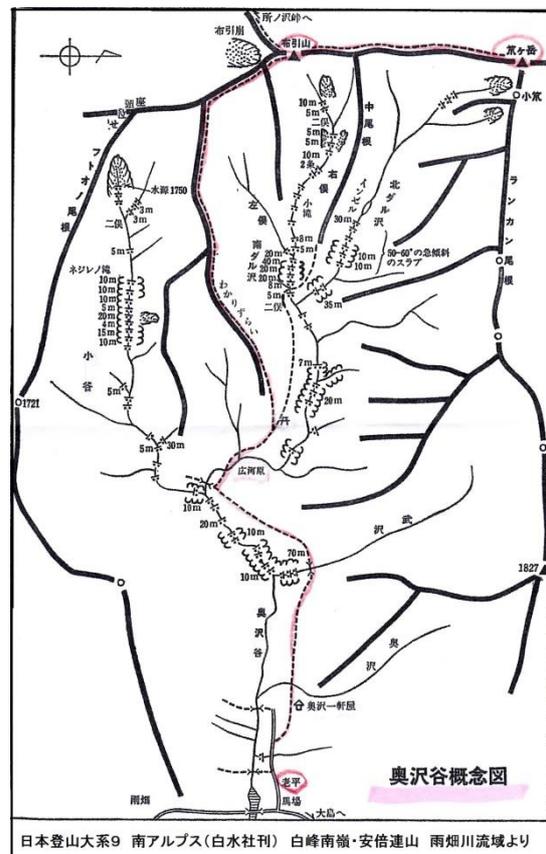
策ヶ岳の存在を初めて知ったのは、20数年前、山岳画家・中村清太郎の名著「山岳渴望」(山岳名著全集11・あかね書房)を入手し「冬の白峰山脈彷徨」を読んだの事だ。弱冠23歳ながらいかにも画家らしい細やかな観察から生まれた描写力と豊かな表現力に感嘆し、明治時代の青年の才能と気力、冒険心に舌を巻いた。

中村は1911(明治44)年11月末、天候や気まぐれな案内人の都合に振り回され、心傷つきながら雨畑谷の硯村の農家に6日間滞在、漸く猟師の案内人を得て策ヶ岳の山頂を踏む事が出来た。辿ったルートは老平から広河原～奥沢本谷・南タルを経て布引山山腹にて露営、翌日布引山から策ヶ岳へ登ったとあり、今のコースとは少し違っている。当時布引山(2584m)は千挺木山と云っていたらしい。

<策ヶ岳概念図>

100名山の人深田久弥の「わが愛する山々」(新潮社)にも、盟友茂知君との紀行が載っているが、それは1960年(昭和35)1月の事、保(ほう)村から二股小屋経由で頂上を目指している。古い地図に今は廃道になっている大武刀尾根というのが載っているのだからそこかと思う。

この時深田は56歳、荷担ぎに雇った若者に途中で逃げ出され、深雪のラッセルにアゴ

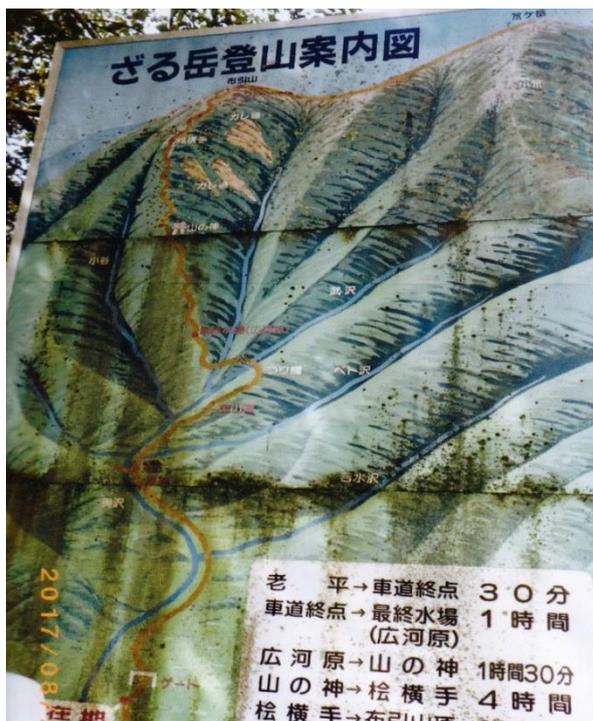


を出し途中から引き返している。山岳写真家白籬史朗が「この山は山中に水場はなく、撮影は降雪後の11月半ば以降か、春の残雪の時以外は難しい。1日では往復出来ず実に厄介な山である」（2017年カレンダー・富士山超絶の美）と云う通り正に大変なのである。

70歳を過ぎ、登り残した山が気になり、この所少しずつ落ち穂拾いをしているが、その中でも最難関がこの策ヶ岳、チャンスを窺い、盟友ツ一さんに声を掛けると200名山を目指していた彼も未踏との事で、即座の賛同を得て、この8月末勇躍出発となった。

山と溪谷社発行の<分県登山ガイド>では「山梨県の山」ではなく「静岡県の山」に組み入れられ、最近は椛島から登山道が整備され東海フォレストの送迎バスを利用すれば比較的容易に山頂に立てるらしいが、私の中では策ヶ岳は断然山梨県の山、迷うことなく中村清太郎の辿った老平からのルートを追う事にした。

8月28日朝7時20分八王子駅前でツ一さんの愛車に拾ってもらい、中央高速道甲府南ICを経て、登山口の老平へと向かう。106年前に中村清太郎が案内人を探し求めて滞在した硯村は現在早川町雨畑地区に組み入れられ、雨畑湖というダム湖の出現で往時とは大きく姿を変えている。ダムの完成は1967年、発電用アーチ式ダムの所有は日本軽金属（株）で、アルミニウム精錬に多量の電力が必要になる為に建設されたもの。本来公共物である河川が一民間企業の自由になるなんて変な話というヤボは云うまい。これこそ戦後日本経済高度成長の象徴、後に「Japan As Number One」と云われるようになった「物作り日本」の原動力ともいうべきもので、皆何らかの恩恵受けてきたのだ。只、最近は大雨等で屢々土砂崩れに見舞われ、ダムは土砂やヘドロが堆積し問題が提起されているとも聞いている。



7~8台停まれそうな老平駐車場だが、今日は私達だけらしい。<ざる岳登山案内図>という大きな看板があり、今日幕営予定の檜横手山までは7時間30分とある。

なんとかその位で辿り着きたいものだが、絞りに絞った我が背中のザックは13kg超、ツ一さんは15kg以上と若い頃と違ってロートルにはこの程度の重量がキツく、深田さん達のように荷担ぎのポーターでも雇いたい所だが、つましい年金生活のこの身、それは寝言で

しかない。

林道ゲート脇のポストに登山届を提出し 10 時 05 分ゆるゆると歩き出す。奥沢谷左岸の林道は途中まで舗装され高曇りの空の下正面にどっしりと聳えるのが布引山のような。

歩き始めて丁度 30 分で林道終点となり奥沢谷沿いのトラバース道になった。10 分程行くと右手に朽ち果てたままの廃屋の前に出た。中村清太郎の紀行にく奥沢谷最奥の孤つ屋。「硯島村七十番戸奥谷繁一」>と云う人家の事が出てくるがそれと同一なのだろうか。瘦せた鶏 2 羽と幽囚の牛が一頭「古びきって寂しい」と書いているのだが、106 年前の家がそのまま残っていたのだとしたら凄い話だと興味深かったが寄らずに先を急ぐ。

トラバース道は土砂崩れでガレた急斜面の横断や崩落した栈道、流水のシャワーを浴びて渡る濡れて滑り易い草付き帯等危険箇所が何カ所もあり緊張の連続となる場面もあったが、それ以外は総じてよく整備されており急登もなく歩き易い。かつては林業用のトロッコ道だったと聞いて納得した。老平から 2 時間程で広河原に到着。老平の看板案内図ではここまで 1 時間半の行程になっていたが、まあこんなものか。

奥沢谷の流れは特に増水している様子もなく飛び石伝いに渡れそうだったが、荷も重いし滑って濡れるのは嫌なので、此処は慎重に靴を脱ぎ裸足でジャブジャブと渡渉、汗にまみれた身には心地良いものだったが、相棒は躊躇う様子もなく石伝いに渡り出し、ストックが滑ったようでドボン、腰まで濡れてしまい大笑い。横着はいけません。



<ドボンして苦笑いするツーさん>

無事右岸へ渡ったところで昼食としたが、良さそうな幕営地があった。以前オーさん達が来た時にテントを張ったというのは此処だろう。ビールをしこたま担ぎ上げオダをあげ、飲み過ぎて翌日は早々に途中退却したと聞いた。ここから先がいよいよ核心部。樹林帯の急登となり、ジグザグと只押し黙って足を進めるだけ、何度も立ち止まって息継ぎしている間に相棒の背中が遠くなる。要所に赤テープがあるので迷うことはなさそうで、絞る程の汗をかき急登を登り切った尾根に祠がぼつんと佇んでいた。広河原から丁度 1 時間、「山の神」と言われている所で、老平の看板に広河原～山の神 1 時間半とあったのは何かの間違いだろう。あんなに何度も立ち止まり休んでいたのだから、30 分も早いわけないのだ。相棒は自分のペースを保ちたいのだろう、ずっと先まで進んでいるようだ。こちらはもう

限界、倒れ込んでまず水を一杯、チョコレートとアンパンを嚙ってホッと一息つく。

これから先は嫌になるくらい長かった。ツーさんは木材運搬用ウインチやワイヤーが放置された薄暗い樹林帯の中で待っていてくれたが、大分待ったに違いない。いつしかモミやシラビソの針葉樹林帯となり幅広の尾根をひたすりに登る。随所に赤テープがあり道迷いの心配は無さそうだが、視界の利かない中、単調な登りは覚悟の上とはいえキツイ。

心が折れそうになり、もう何処でもいい、荷物投げだしゴロンと横になりたいと何度思った事だろう。独りだったら適当な言い訳考えて引き返しているところだが、相棒がいるのでそんな弱音は吐けない。意地があるという事はまだ若さが少しは残っていると云うことか。も少し、も少しと呟きながら歩みを進めていくと、ツーさんが左手に2人分のビバーク適地を見つけて此处にしましょうと立ち止まった。よくよく見ると小さな標識があり、そこが檜横手山（2021m）の頂上だった。知らずに通り過ぎてしまうような頂上で、こんなピークは初めてだ。時間は16時35分、老平から6時間半はなんと看板に書かれたコースタイム7時間半よりも1時間も早い事に驚く。やっぱりあの看板はおかしいと思う。



<布引山中復からの策が岳>

大シラビソの下に各自ツェルトを張り、夕食はツーさんのお

雑煮。頑張って担いできたビールとウイスキーを飲むと、疲れたせいかすぐ眠くなった。翌朝は4時半起床。まだ暗かったがごそごそしている間に濃密な針葉樹の梢越しにしらしらと明け始め、5時40分出発する。すぐに木の根、岩角つかんでの急登となり息があがる。

ビールや水を消費したのでザックは11kg位に減っているはずだが、それでもハア、ハア、ゼー、ゼー、休み、休みトロトロとしか歩けない。カヤツリグサかイネ科の草付帯、トリカブトの群落を過ぎるとガレた尾根に出た。布引崩れという箇所では左側はスパッと切れ落ち聖岳等の眺望が得られるとの話だが濃霧に覆われ何も見えない。流れ来る霧は霧雨となり身に纏い付き冷たい風に曝され雨具を着ていても寒く、マイッタなあとブツブツ呟きながら歩いていると、いきなりパッと布引山の頂上に出た。

8時05分、もっと先かと思っていたので、これは嬉しい誤算、ヤレヤレだった。テン場から2時間25分、老平の看板とほぼ同タイム、結構頑張ってるわけだ。策ヶ岳はここから150m以上下り、鞍部から又200m近く登り返さねばならないのだから、白簷氏の云う通り実に厄介な山だ。鞍部へ下る途中大策、小策が顔を見せ、ここで漸く策ヶ岳の全貌を拝する事が出来た。下った所で荷物をデポ、水とカメラだけの空身で頂上へ向かう。頑張って石楠花とハイマツの中を行けば9時45分遂に頂上、テン場から4時間強はまずまずだ。二人共日頃の行いが良いのだろう、待っていたかのように霧は消えて眼前に聖、赤石、北岳と南アルプスの大展望が開け、小策の先には富士山も見え「やったね」と途中の苦労が報われた2人はニンマリ。



<頂上からの「子策と富士」、文中の白簷史朗氏の
カレンダーと全く同じ構図が眺められた>

このご褒美があるから又山に来たくなるのだ。中でも屋根型の聖岳が良い恰好で、来年はあちらから策ヶ岳を眺める事にしようと胸に誓う。いつまでも名残惜しい山頂だったが先を考えると長居は出来ず、早々に下山の途につく。山の神から広河原への急斜面は疲れがドット出て足を引きずりながらも嫌になったが、何とか頑張って5時20分老平に下山した。



<策ヶ岳山頂からの聖岳>

本日の所要時間11時間40分、噂通りの厳しい山だったが、宿願果たして大満足。2日間誰にも会わなかったが、老平で会った地元の親父さんが云うには、最近は若者が増え10人中8



人は日帰りで、トレランの連中は7時間位で往復するらしい。若い頃は泊まりがけで登山道を整備したという親父さんは70歳を超えて登ったのは立派だよと誉めてくれた。(了)

<布引山を下るツーさん>

